

「こころの再生」府民運動

中学校

「大切なこころ」を見つめ直して



大阪府教育委員会

## 「こころの再生」府民運動とは

昔も今も、これからも、大切にしなければならない5つのこころ

生命を大切にする

思いやる

感謝する

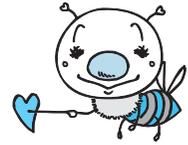
努力する

ルールやマナーを守る

を今一度見つめ直し、

あいさつをする

など一人ひとりが身近な取り組みを行うことを呼びかける運動です。

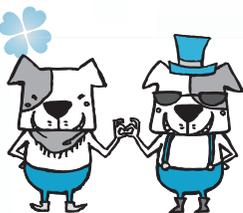


### 子どもたちへ おおさか (大阪「こころの再生」宣言より)

君たち一人ひとりが、多くの生命のなか、「ただひとり」の「生かされている」存在であることに気づいてほしいのです。そして、今一度、生命の大切さ、人としての尊厳の大切さを確認しましょう。

よりよく生きるため、自分が一番大切にしたいこと。「一生懸命努力する」「思いやりの心を持つ」「自分に責任を持つ」「感謝の気持ちを忘れない」。ひとつでもいいのです。「こころ」のよりどころを確かなものとするため、自分の『「こころ」のルール』を持ちましょう。決めるのは、君たち自身です。

自分の夢や希望、目標に向かって、全力で取り組みましょう。「自分の本気」が、自分の未来を拓くのです。大人は、君たちを応援します。やってみなはれ。



この資料は、「こころの再生」府民運動の『5つのこころ』や『あいさつを大切にする』ことをテーマに、皆さんが自分の「こころ」を見つめ直し、身近なことから始めてみるきっかけになるようにと願い作成しました。皆さんの「こころ」に届くことを期待しています。



# 目次

「ここからの再生」府民運動とは	2
あの人からのメッセージ 赤星 憲広さん	4
あの人からのメッセージ よぬこ 濱口 優さん	5
<b>生命を大切に</b>	
● 絶やしてはならない — 緒方 洪庵 —	6
ワークシート 絶やしてはならない — 緒方 洪庵 —	11
<b>思いやる</b>	
● 埋み火	12
ワークシート 埋み火	17
<b>感謝する</b>	
● 背番号 10	18
ワークシート 背番号 10	23

## 努力する

● 目標をもつということ	24
ワークシート 目標をもつということ	27
<b>ルールやマナーを守る</b>	
● 缶ケリ	28
ワークシート 缶ケリ	33
<b>「あいさつ」をもっと大切にしよう</b>	
● まいどー	34
ワークシート まいどー	37
「あひのこ」+「あひのこ」をする	38



みなさん、「こんにちは！」元阪神タイガースの赤星です。僕はこれまでの人生の中で多くの人に支えられてきました。周りの人のサポートがないと今の自分はないと思っています。体が小さく、「どうしてもっと大きく生んでくれなかったらどうだろう。」と思ったこともありましたが、プロ野球選手として小さいことを武器にすることができ、今では両親にも感謝しています。感謝する気持ちは、今はわからないかもしれませんが、これから多くの方に出会う中で感謝の気持ちが生まれていくと思っています。

僕は、現役時代、プロ野球選手になって何か社会に「貢献したい」と思い、盗塁を決めた数の車椅子を贈る活動をしていました。僕が車椅子を贈るき

かけとなった女性は、若くしてこの世を去りました。もっともっと生きたいと思っても病気のためこの世を去る方は大勢います。どんなに苦しくても自ら命を絶つような行動は絶対にしてはいけないと思います。一人で悩まず、両親や友達に相談してみてください。考え方を少し変えるだけで気持ちが楽になったり、違う道が見えてくると思います。

今の子どもたちは、夢を持つ子が少ないと聞いています。「夢に向かって努力する」という言葉がありますが、「努力すること」を重荷に感じていませんか。「好きなこと・やりたいこと」を見つけて突き進んでみませんか。それが「努力すること」につながりきつと道は開けると思います。夢を見つけてください。

## 赤星 憲広 (あかほし のりひろ)

●1976年4月10日生まれ。1993・94年甲子園選抜大会出場、2001年阪神タイガース入団。新人王、盗塁王、ゴールデングラブ賞などを獲得、2009年12月引退。2003年～引退までは盗塁した数の車椅子を病院や施設に寄贈。2005年少年野球チーム「NPO法人レッドスターベースボールクラブ」設立。引退後も「Ring of Red～赤星憲広の輪を広げる基金～」を設立し、車椅子寄贈を継続。2012年からは「Ring of Red交野市チャリティーマラソン」の実行委員長を務める。



みなさん、よるこの濱口です。僕は、「あいさつ」って一番大事やなと思ってる。でも、僕は、ほんま、あいさつでけんかかってん。というか、しなくても相手は分かってくれるやろうと思ってた。でも、芸能界入って、「あいさつ」って大事やなと思うようになった。あるとき、マンションで、親子連れに会ったんやけど、こっちがあいさつしようかどうか迷っていると、子どもの方から、「おはようございます」ってあいさつしてくれてん。心にグサツときたわ。大人の方が相手はどう思うか、気にするんやと思う。子どもの方が素直やねん。みんなも勇気を出してあいさつしようや。

努力するっていう言葉も、あんまり重く考えなくてもいいと思うよ。僕も、体を動かすことが苦手で、無人島で潜って魚獲ったり、最初はしんどかったけど、やってるうちにだんだん楽しくなってくる。苦手なこともやればできると思ってる。でも、めっちゃ頑張って、

これ以上無理やというぐらいやっても、結果が出えへんこともある。僕なんか、どんなにネタ合わせしても、やっぱりお客さんにウケへんことってあるもん。そんな時には、「努力したの」と自分を納得させるために「努力」という言葉を使うことがあるねん。僕はそれでもええと思う。それで、次、頑張ろうと前向きになれるんやったら、言葉っていろんな使い方してええと思うねん。

僕は、「ありがとう」っていうの苦手やねん。言わなくても、相手は分かってくれるやろうと思ってた。でも、東京に出てきて、いろんな人にお世話になると、自然と「ありがとう」と言うようになった。それで、実家に帰った時に、おかんにも、この飯うまいなと言ったら、おかんが涙ぐんでた。気持ちでわかってくれると思ってても、やっぱり、言葉にせなあかんなど改めて思ったわ。みんなも、恥ずかしがらず、言葉にしような。

### よめこ 濱口 優 (はまぐち まさる)

●1972年1月29日生まれ。1990年松竹芸能にて活動開始。1992年、第13回「ABCお笑い新人グランプリ」審査員特別賞受賞。第27回「上方漫才大賞」新人奨励賞受賞。1999年 ドーバー海峡を水泳で横断。2003年 海に潜ってモリで魚を獲った際の「獲ったぞ~!!」というセリフが大流行。現在もバラエティをはじめ多数のレギュラー番組で活躍中。



# 1 絶やしてはならない —緒方洪庵—

幕末、大阪を中心に活躍した一人の蘭学者がいた。緒方洪庵である。

洪庵は、文化七年（一八一〇年）、備中の国（今の岡山県）足守藩士の三男として生まれた。十六歳の時、父が蔵屋敷の留守居役に任ぜられたのに従って、大阪で生活を始める。ほどなく洪庵は、西洋医学を専門にする蘭学者の中天游に出会い、蘭方医になる決心をした。

天游のもとで熱心に勉強し、翻訳書を読み尽くすと、天游から原書を読んで勉強をするように勧められ、江戸の坪井信道の塾に入門した。そこでオランダ語の原書を数十巻読み込んだ。苦勞と努力の末に身に付けたオランダ語の力量は、信道の師の宇田川榛齋に認められ、榛齋の著書に書いてある薬の分量について、日本人々々に分かるように日蘭の換算表をつけてもらいたいと頼まれるほどであった。江戸にいる間にいくつかの医学書を翻訳した洪庵は、学者として名をあげていく。

その後、洪庵は長崎に蘭学修行に出掛ける。

江戸時代、人々から恐れられていた病気の一つが、人から人へとうつる天然痘で、毎年のように流行し、多くの人が命を失った。たとえ命をとりとめても顔に天然痘の痕が残ったり失明したりする者もあった。その頃医師たちは天然痘に一度かかると二度と発病しないことに気付き、人工的に軽い天然痘にかからせることを考えついていた。しかし、天然痘にかかった人の膿を、腕に傷を付けて接種する人痘種痘法は、それがもとで本当に天然痘になってしまうこともあり、危険を伴うものだった。

長崎から足守に戻った洪庵は、五歳の甥と二歳の姪に天然痘予防のための人痘種痘を行った。ところが、二人の腕は腫れ、発熱してしまった。幸い甥と姪の熱は下がり、ことなきを得たが、命を

蘭学  
オランダ語をもとにして学ぶ  
西洋の学問のこと。

蔵屋敷

年貢（ねんぐ）米や特産物などの保管や取り引きを行うための、倉庫兼（けん）取り引き所。

蘭方医

蘭学を通じて西洋医学を学んだ医者のこと。

原書

この場合は、外国語で書かれている本のこと。

日蘭

日本語とオランダ語のこと。

天然痘

非常に感染力（かんせんりょく）が強く、当時は死亡率も高かった病気。

第一に考える洪庵は、危険を伴う人痘種痘法を村の子どもたちへ施すことはできなかった。

西洋の医学書を読んでいた洪庵は、<sup>\*</sup>ジェンナーの牛痘種痘法を知っていた。牛痘種痘法は、乳牛を飼う人が牛痘にかかる、その後二度と人の天然痘にかからないという発見から開発されたもので、ヨーロッパでは安全性と有効性が認められていた。洪庵は、牛痘苗が日本に入ってくるのを今か今かと待ち続けた。

5

嘉永二年（一八四九年）、洪庵三十九歳の

時、ついに、牛痘種痘に成功したとの知らせが京都の日野鼎哉から届いた。かねて福井藩の笠原良策が、京都の鼎哉を通じ依頼していた痘苗が長崎から届き、種痘に成功したという。

10

「天然痘予防の痘苗が京都に来たぞ。」

日頃の洪庵らしくない上ずった声で、弟子の日野葛民に告げると、大和屋喜兵衛の家に向かった。これで、天然痘にかかって命をなくす者がなくなるのだと思うと洪庵の足はひとりでに速くなった。

15

「洪庵先生、種痘を接種する場所は私が用意いたします。」

20

喜兵衛は蘭学者洪庵の良き理解者であり



▲緒方洪庵像

ジェンナー  
天然痘を研究したイギリスの  
医師。

痘苗  
種痘に使う材料のこと。

支援者であった。喜兵衛はすぐに近所の隠居所を借りて「除痘館」開設の準備を進めた。

これを見届け、洪庵と葛民は急ぎ京都に向かった。

「長い年月、待ち続けてきました。子どもたちを救ってやりたいのです。痘苗を分けていただけませんか。」

丁寧<sup>ていねい</sup>に頼む<sup>たの</sup>む洪庵をじっと見つめ、良策はしばらくして口を開いた。5

「実は、この痘苗は福井藩御用のものなのです……。ですが、命を救いたいという思いは誰でも同じです。痘苗を絶やさないためにお分けします。」

「ありがとうございます。ついでには、私どもは種痘

のやり方が未熟です。ぜひ実地に教えていただき  
きたいのです。」

十一月七日、霜の降りた寒い朝、大阪の

洪庵のもとに、良策と鼎哉が淀川を船で下  
ってきた。洪庵と仲間の医師たちは除痘  
館にうちそろって出迎えた。連れてき

た一人の子どもの腕から、一人の子ど  
もに痘苗を植えつなく儀式が厳かに  
行われた。そしてまた次の子どもに。

順々に八人の子どもに苗を植えつな  
いだ。

四日目に、良策と鼎哉は、子ど

20



実地  
理論だけではなく、実  
際にそれを行うこと。

もの腕を見ると、頬をゆるませた。

「大丈夫です。種痘は成功です。」

「よし、これで多くの命が救われる。」

洪庵とその仲間の医師たちは、希

望に胸をふくらませた。ここに大阪で

の種痘の第一歩が始まった。

除痘館の種痘日は七日目ごとと決められた。

初めのうちは種痘に来る者があつたが、間もなくぱたつと途絶えた。どうしたのかと調べてみると、種痘をすると牛になる、子どもに害があるとの風評が広がっていた。人々に効能の説明をしても、いったん立った風評を覆すことは並大抵のことではなく、町の人々は耳をかさなかった。

漢方が支配していたこの頃は、西洋医学を理解する人は少数で、漢方医から、牛痘種痘法に反対する書物も出て、人命を救うために始めた種痘事業は、世間の無知と反対勢力の誹謗中傷にさらされた。しかし、洪庵は諦めなかった。洪庵は、門弟に指示して、種痘をする子どもを探させた。

「このままでは、痘苗が絶えてしまう。」



風評  
世間でいろいろ取りざたすること。うわさ。

漢方  
中国から伝わった医療のこと。

誹謗中傷  
根拠のない悪口のこと。  
門弟  
弟子（しし）のこと。

洪庵は、自腹を切つて金を出し、米や菓子と引き替えにしてまでも子どもに種痘をしていった。

「種痘によって、必ず命が救われるのだ。だから、一日に一人でもいい。痘苗を絶やしてはならない。」

洪庵の切なる願いが浸透するには時間がかかった。

しかし、毎年のように流行する天然痘に、種痘をした子どもはかからないという実績が目の前に

表れてきて、町の人々は変わり始めた。

「先生、これで、子どもたちは救われます。」

門弟の言葉に、洪庵は目を細めてうなずいた。洪庵

の前を「種痘済み」の証明書を持つ親子連れが次々と

通っていった。

\* \* \*

洪庵の設立した適塾は、日本の蘭学のメッカとなり、慶應義塾を創立した福沢諭吉、初代内務省衛生局長として近代医学の基礎を築いた長与専齋、日本赤十字社を創設した佐野常民等々、多くの人材を輩出した。

15

10

5



▲大阪府にある適塾

自腹を切る  
自分のお金で払(はら)うこと。

10

適塾  
緒方洪庵が大阪にひらいた蘭学  
の塾のこと。

メッカ

この場合は、ある物事を中心  
として、人々が集まること  
ころ。

輩出

すぐれた人物を世に出すこと。

# 絶やしてはならない お がた こう あん 一緒方洪庵

●「絶やしてはならない一緒方洪庵」を読んで考えたこと



## 2

埋み火うす

病院の門まで続いているプラタナスの木立をナー  
ス・ステーションの窓から眺めながら純子は看護の在  
り方について考えこんでいた。

患者の肉体的な痛みは、医療の技術や施薬\*せやくによって  
除いてあげることが多い。しかし、化学療法りょうほうを受け  
つけなくなつて、明日をもしれない患者さんの看護は  
どうあつたらよいのか。やさしい言葉をかけても、「が  
んばつて。」と言つてみても、むなし響きひびでしかな  
かった。

そんなようすを見た先輩は、色々な経験を純子にア  
ドバイスしてくれた。確かに看護婦\*かんごふとして、看護に限  
界があることは純子も理解している。自分なりに、精  
一杯努力いっぱいしている。でも、患者さんの苦しみをやわら  
げてあげることのできないもどかしさがある。

看護に悩みながら、いそがしい日々を追われていた  
純子は、十二月に休暇を利用して、東北の山あいの小  
さな温泉に出かけた。東京生まれの純子は、山あいの  
風景にあこがれていた。

施薬  
病人に薬を調合して与（あた）  
えること。

看護婦  
現在は看護師。

バスを降りて、曲がりくねった山あいの道をぬける  
と今日の宿となる旅館が見えてきた。雪が陽の光を反  
射してまぶしい。キラキラする光が自分の身体を洗っ  
てくれているように思えた。

口数少ない宿の主人は、いつものように、客のもて  
なしに心をくだいていた。陽が落ちると、さすがに底  
冷えがした。山菜を中心とした料理をいただき、ゆっ  
たりと温泉の湯につかっていると疲れが溶けてゆくよ  
うであった。

「いろいろのそばで話でもしませんか。」

と、さそってくれたおかみさんの言葉に甘えて、世間  
話のひとつを楽しんだ。おかみさんは、

「雪国には、何もめずらしいものはありません。雪だ  
けです。雪を十分に堪能してください。」  
と話してくれた。その上、

「雪の日には花はいらないんです。」  
と言ってほえんでいた。

宿へ来る道すがら純白の美しい雪の花を見てきたお  
客に、それ以上花はいらないからだという。

「底冷えの夜の一番のごちそうは、いろいろの火。たく  
さん暖まってください。」

底冷え  
体のしんまで冷えること。ま  
た、そのくらいの寒さ。

いろり  
床（ゆか）を四角く切って、  
暖房（たんぽこ）や煮炊（にた  
き）のために火をたくようにし  
た所。

「さすがに東北の夜ですね。」と話がはずんだ。

「そろそろおやすみになりますか。」

と、おかみさんは、純子を部屋まで案内してくれた。廊下の冷えびえした空気は身体を突き刺すように思われた。

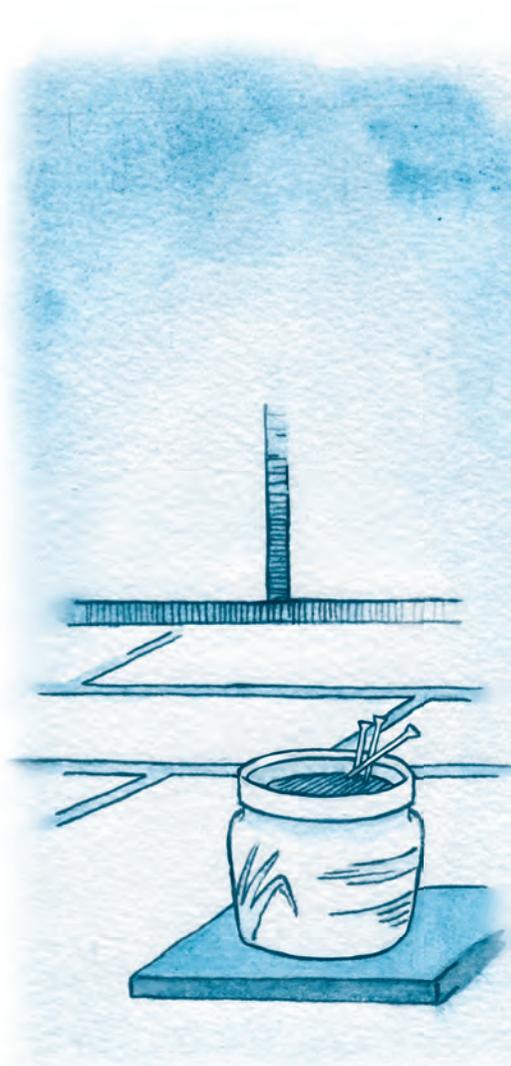
(部屋も冷えただろうな。暖房設備もなかったようだし。)

「……ん。なんとなく温かいわ。」

と純子はつぶやいた。部屋には、鉄瓶のかけられた火鉢があり、火鉢の中には「炭火」がいけられていた。これが、「埋み火」かと純子は感動した。

おかみさんの話では、表に火は見えなくても内の暖かい「埋み火」で、かけてある鉄瓶もさめず、部屋の中もぬくもります、とのことであった。

そんな雪国に生きる人たちの心づかいをみやげに、純子はまた東京に帰った。列車の中で、純子は「雪の日には花はいらない」といったことや「埋み火」のことをくり返しくり返し思い起こしていた。



10

5

炭火をいける  
炭火を灰の中にうめたり、火  
鉢などの灰の上に置いたりす  
ること。

純子は、また通常の勤務にもどったが、おかみさんの言葉が念頭から離れなかった。

そんな折、明日をもしれない患者さんの看護にあたることになった。痛みも激しく、何も受け付けず、精神的にもかなり動揺をきたしている患者さんであった。

その患者さんは、身体全体を震わせ、激しい痛みにも、自分のこぶしを固く握りしめていた。

「ううー」と呻くように耐えている患者さんの右手を逆に握り返した。自分の痛みがまた激しくな  
ったのか、指の骨が折れんばかりの強い力であった。

今、純子にできることは、指の痛さをこらえ、

さらに患者さんの手を力強く握りしめることだけであった。

そんな状態が、どれくらい続いたのだろうか。

純子の手は、血の気を失い、感覚も薄れていた。患者さんはいくらか楽になつたらしく、落ち着いたように思われたので、そっと手をはず

そうとした。そんな動きを察したのか、患者さんは純子の手をかえって強く握りしめた。

(すみません、少し……)と言いかけて純子は、

言葉を飲み込んでしまった。

純子はその時ふと「雪の日の花」のことや、「埋み火」の暖かさのことを思い出していた。

(私には患者さんの痛みを分かち合うこともできない。)

20

15

10



5

(できることは、できるだけ長く握りしめてあげるだけ。)  
と純子は改めて決心した。

患者さんもそれを察したのか、握りしめているその手から、純子への信頼のぬくもりが伝わってきたように感じられた。

5

患者さんが息を引き取ったのは純子の非番のときであった。遺族の方々から、

「安らかな最期でした。純子さんによろしく。」とのことづてであったことを先輩からうかがった。

10

純子は、寒い雪国のあのぬくもりを思い出しながら、心の中でおかみさんに語りかけていた。



うす  
埋み火

思いやる

●「埋み火」を読んで考えたこと



ジリジリと太陽が照りつけるグラウンドは白く乾ききっている。ノックのボールが右へ左へと容赦なく飛んでくるたびに砂煙<sup>すなけむり</sup>があがる。飛びついて捕球<sup>ほきゅう</sup>したボールを握ろうとしたが、汗<sup>あせ</sup>で手が滑<sup>すべ</sup>った。一瞬<sup>いっしゆん</sup>本塁<sup>ほんるい</sup>への送球<sup>そうきゅう</sup>が遅れた。監督<sup>かんとく</sup>の厳しい声<sup>こゑ</sup>がとんでくる。

「しっかり掴<sup>つか</sup>まんかあ。」

**本塁**  
野球でホームベースのこと。

僕は、甲子園<sup>こうしえん</sup>に出たくてこのS高校を選んだ。両親は、家から近い高校を強く勧めたが、それを押し切って入学した。

5

それから一年余りが経ち、夏の県大会で惜敗<sup>せきはい</sup>した先輩<sup>せんぱい</sup>が引退した後、僕はキャプテンとして新チームを引っ張る立場になった。チームの目標は「甲子園出場」。これは決して夢ではない。過去には何度か甲子園に出場しているS高校であり、地元は野球好きの人が多く土地柄<sup>とちがら</sup>として有名で、期待も大きい。

**惜敗**  
おしくも敗れること。

「よし もう一本。」

大声で監督に答えた僕の目の前に、強烈なスピードでノックのボールが迫る。その瞬間に目の中に汗がしみこんだ。ボールがぼやけて大きくなったが、必死に地面を蹴<sup>け</sup>ってボールを体ごと受け止める。投げたボールがキャッチャーミットにバシッとおさまった。

15

「ようし、終わり。」

大きな声に、ほっとしたのもつかの間。連係プレー、走塁練習<sup>そうるい</sup>、打撃練習<sup>だげき</sup>と息をつく間もなく練

習は続く。用意したお茶はすぐになくなり、顔や腕は塩を吹く。

こうして、夏の苦しい練習をこなしきり、新チームの力を試す秋の新人戦を迎えた。僕は、チームはかなりの力をつけたと思っていた。しかし、一回戦、二回戦と勝ち抜いた後、準々決勝に臨んだが、強豪のY高校に逆転負けしてしまった。この敗退は春の甲子園出場が絶望的であるということを意味する。

5 強豪  
強く、手ごわいこと。

翌日の練習は、暗いムードが漂っていた。

「あんなに苦しい練習をやり抜いてきたのに……。」

「やっぱり俺らには、甲子園は無理ってことだ。」

と言いつけ出す者も出てきた。

10

走塁練習や守備練習の動きは、新人戦前と明らかに違っていた。それでも監督は三日間黙ってその様子を見ていたが、四日目の練習の後のことだった。監督は全員を集め、みんなを見回してただ一言、

「お前たち、それでいいのか。」

と言った。みんなは黙って下を向いた。僕はキャプテンとして身が縮まるような思いがした。

15 身が縮まる  
恥し入ることなど。

僕は、それからは、後始末やグラウンド整備の不備に対して、あるいは動きの緩慢さや小さなミスに、だれかれなく大声を出してとがめた。しかし、一向にみんなの気持ちは高まらず、僕の気持ちは我慢の限界に達していた。

15 緩慢  
動きがゆったりしてのろいこと。

「こんなじゃ甲子園なんかとても無理。キャプテンなんかやってられんわ。」

思わず父の前で不満を口にした。父は黙って聞いていた。

20

それでも、冬場の練習を何とか続けていた。

「集合が遅いじゃないか。」

「もっと真剣にやれよ。」

自分のイライラをぶつけるかのように注意する僕を、次第に同級生や下級生は冷ややかな目で見ようになった。時には避けるような行動をとる者さえもある。どうすればいいのかわからなくなっていく自分がいた。

そんな二月の寒い日。遠投練習をしていたその時、

「あっ。」

突然、右肘に鋭い痛みが走った。腕がダランとなって力が入らない。思わず肘を押さええてうずくまった。曲げようとするとまた痛みが襲ってくる。監督は僕の様子を一目見て、

「すぐに病院へ行こう。」  
と促した。

医者と言葉は無残だった。

「右肘が剥離骨折している。完全に治るまでには半年くらいはかかる。それまでボールを投げてはいかんぞ。」

僕は目の前が真っ暗になった。

「そんな……。」

思わず口走る僕を、医者はじろっと見た。確かに肘を曲げることもできないのだから、ボールを投げるどころではない。これでは顔も洗えない。

電車に乗ったこともはつきりとは覚えていない。気が付いたら駅に着いていた。家への道をたどりながらさまざまなのが脳裏に断片的に浮かんで消えた。

固定された僕の腕を見て、父は驚いたようだが、僕の説明を黙って聞いた。

「父さん、僕、野球をやめて勉強に専念しようか。」

ボソッと、つぶやいたとたん、

「お前の野球に対する思いは、そんなもんだったのか。」

と、一喝<sup>いっかつ</sup>された。思わず父の顔を見ると、顔が真っ赤になっていた。こんな父を見たことがなかった。父は高校進学の時、野球より勉強をと近くの学校を勧めたはずなのに、どうしてだろうか。その晩、5  
いろいろなことを考えていると布団<sup>ふとん</sup>に入ってもなかなか寝付<sup>ね</sup>けなかった。

次の日、僕は授業が終わるのを待ちかねて急いで部室に行った。いつものように着替<sup>き</sup>えてグラウンドに出て、グラウンド整備、バットやボールの準備など、自分のできることをした。これまであんなに避けていた部員が心配そうに見ているのが目に入った。

毎日練習に出てもバットを振<sup>ふ</sup>ることもボールを投げることもできない。ひたすら、チームメイトたちに言葉を掛<sup>か</sup>け続けた。側<sup>そば</sup>で見ていると、グラウンドでプレーしている時には見えないことがよく見える。ポケットに入れたメモ帳にさっと書きとめ、時間を見つけては、彼ら<sup>かれ</sup>に伝えた。よいプレーの時は、

「ナイスバッティング。」

「いいぞ。」

と、大きな声で励<sup>はげ</sup>ました。そのうち、

「キャプテン、ちょっと聞いて欲しいことがあります。」

20



「居残り練習に付き合ってくれよ。」

と、僕に言うようになってきた。

北国の遅い春が訪れた頃には、チームにすっかり明るさと元気が戻ってきて、どんどん結束も固くなった。練習の最後に、僕が声を掛けて、

「甲子園、行くぞ。」

\*と円陣を組むのが習慣になってきた。

夏の甲子園大会の県予選が近づいてきたある日、練習が少し早めに切り上げられ、集合の合図があった。

「ベンチ入りのメンバーを発表する。」

監督の言葉に、みんな緊張の面持ちだ。

「橘。」

真っ先に名前を呼ばれた僕は、えっと耳を疑った。故障者の僕が選ばれるはずはない。

一番前に座っている僕を監督はまっすぐに見ている。

「背番号10だ。お前はキャプテンとしてずっとよくチームを見てくれた。大会でも頼むぞ。」

その時チームメイトから拍手が起こった。拍手に促されて立ち上がり、監督の差し出すゼッケンを両手で受け取った僕は、監督に一礼した。すると、もう一度さらに大きな拍手が起こった。総勢八十人の拍手がぐっと胸に迫ってくる。僕は深々と頭を下げた。

この年、S高校は、十一年ぶりに県の頂点に立ち、甲子園出場を決めた。背番号10はベンチにいるキャプテンだった。

20

15

10

5

円陣  
輪状に人が並んだ様子。

# 背番号 10

●「背番号 10」を読んで考えたこと



## 4 目標をせしむるべし

僕は先日、<sup>\*</sup>ノーベル賞を受賞した山中さんが書いた、中学生時代の文集についての記事を読みました。

記事の中で、中学三年生の山中さんはこう言っていました。

「目標をもつことの意義を知った。」

中学生時代、柔道部じゆうどうに所属していた山中さんは、自身に「初段を取るとること」と「団体で市大会に優勝」という二つの目標を課して、柔道に打ち込んできたのだそうです。そして、三年間の中学校生活の間に本当に初段を取り、団体戦でも三位入賞を果たしました。

だけど、その上で、中学生時代の山中さんはこう言っています。

「その時はうれしかったが、突然、<sup>\*</sup>虚脱感きよたつかんというかむなしさむなしさというかそんな物が襲おそってきた。目標がなくなっただけで、このとき初めて目標をもつことの意義を知った。」

この言葉に、僕は大きなショックを受けました。同時に、山中さんに強い興味をもちました。それで僕は、山中さんについて書かれた本を何冊か読んでみました。その本

15

10

5



### やまなか しんや 山中伸弥

■大阪府出身の医学者。現在は京都大学 iPS 細胞研究所所長、教授。

■ヒトの体細胞に、少数の遺伝子を導入し、培養することで、いろいろな組織や臓器の細胞に分化する能力をもつ人工多能性幹細胞 (iPS 細胞) に変化することを発見し、2012 年にノーベル賞を受賞した。

ノーベル賞  
世界的な賞。物理学、化学、生理学および医学、文学、平和、経済学の六部門においてそれぞれ功績のあった人に授与（じゅよ）される。「生理学および医学の分野で最も重要な発見を行った」人に与（あた）えられるノーベル生理学・医学賞を、山中教授は受賞した。

意義  
その事柄（ことがら）にふさわしい価値。値うち。

虚脱  
体力も気力も失せて、ぼんやりとして何も手につかない状態になること。

の中に、現在の山中さんの医師としての目標が書かれていました。

「難病で苦しむ患者<sup>かんじや</sup>さんを、なんとか治す方法を探したい。」

僕は驚<sup>おどろ</sup>きました。なぜなら、山中さんにとって、\*iPS細胞を作るといふ大きすぎるほどの目標は、その先にあるさらに大きな目標のための、一つの段階なのだということに気づいたからです。もし僕なら、一つ目の目標を達成した時点で、そこでやめてしまうと思います。目標を達成したのだから、あとはもう楽をして過ごしたいと思うかもしれません。

けれど、山中さんは違<sup>ちが</sup>いました。山中さんは、ノーベル賞の授賞式が終わった一週間後には、もう普段<sup>ふだん</sup>通りの研究をはじめていたのだそうです。

「難病で苦しむ患者<sup>かんじや</sup>さんを、なんとか治す方法を探したい。」という大きな目標に向かって、次々と目標を作り出していく山中さんを、僕はすごいと思いました。僕と同じ

20

15

10

5



▲京都大学 iPS 細胞研究所

iPS細胞  
人工多能性幹細胞のこと。  
ページ参照。

26

中学生だった頃から、山中さんは目標をもつことの意味を知っていたから、もっと先の大きな目標に向かつて、きつと立ち止まらずに進んでいけたのではないかと思いました。

僕は、山中さんをとても格好いいと思います。

僕も、小学生の頃は、いろいろな将来の夢や目標をもっていました。けれど、中学生になってからは、そういうたくさんの夢がなんだかしぼんでしまったような気がしていました。勉強も一気に難しくなりましたし、挑戦してみても、うまく行かないことが増えてきたからだと思います。少し試してみてもうまく行かないと、すぐに諦める癖がついてしまいました。

けれど、きつとそれでは、大きな夢や目標は達成できないのだと思いました。山中さんのように、次々に目標を立てて、少しずつ進んで行かないと、遠くにある大きな目標にはたどり着けないのだろうと思います。

山中さんのことを知って、僕は自分に足りないものが何なのか、ようやくわかった気がしています。

(生徒作文)

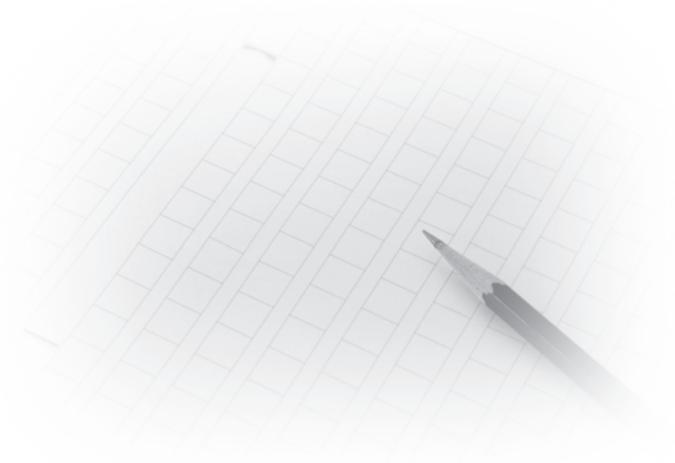
10

iPS細胞は、人工多能性幹細胞 (Induced pluripotent stem cell) と呼ばれる細胞で、筋肉や皮膚のような様々な組織や、心臓や肝臓などの臓器の細胞に分化できる能力と、ほぼ無限に増殖する能力を持っています。iPS細胞は、病気の原因の解明や、新しい薬の開発、細胞移植治療などの再生医療に活用できると考えられています。名付け親は、世界で初めてiPS細胞の作製に成功した京都大学の山中伸弥教授です。

(資料作成ワーキング会議編 山中教授の文集の内容は、毎日新聞平成二十四年十月九日号より)

# 目標をもつということ

●「目標をもつということ」を読んで考えたこと



僕は、おおいっっ子の子の潤じゆんいち一いちに半はんば引ひっ張はられるようにして、その公園まで連れてこられました。大学を卒業した年の初夏、久しぶりに帰省ききョウした僕ぼくに、友達ともだちを紹介しょうかいしたいと言うのです。

そこは雑木林に囲まれた大きな公園でした。五、六人の小学生たちが潤一を待っていました。僕にみんなを紹介してくれます。小学校の低学年くらいの子から、潤一と同じ六年生までの子がいました。いつもみんなで遊んでいるのだと言います。

今日、子どもたちが選んだ遊びは、どうやら「缶ケリ」のようでした。

潤一が缶コーヒの空き缶を地面に立てながら言いました。

「ええな。隠かくれていいのはこの公園の中だけ。公園の外の道に出たら反則や。」

それを受けてくりくり頭の男の子が手を挙げて言います。

「ジャンブルジムとかすべり台の上は？」

潤一があきれたように言いました。

「ケンタ……、何いうとるん。そんなとこ登ったらまっさきに見つかるやろ。」

くりくり頭の男の子はケンタという名前なまえのようでした。潤一にそう言われて恥はずかしそうに体をもじもじさせています。

「茂しげみに隠れるんは？」

「それはオーケーや。けど気きいっけんとあかん。やぶ蚊かがようけおるで。……よし、ほんならじゃんけんや。鬼おにを決めるで。」

どうやら子どもたちのリーダーを務めているのは、六年生の潤一じゆんいちのようでした。じゃんけんに負

おおいっっ子の子  
兄弟姉妹の子(男の子のこと)。  
帰省  
ふるさとに帰ること。

けて鬼になったのは、赤い帽子をかぶった四年生くらいの男の子でした。潤一に言われてケンタが缶を蹴り飛ばします。鬼になった赤帽くんが慌てて缶を追いかけていきました。それを合図に子どもたちはワツと散らばり、公園中に消えて行きます。

——懐かしいなあ。僕が子どもの頃とほとんど変わらないや。

そんなことを思いながら、ベンチに腰かけて、僕は子どもたちの様子を眺めていました。子どもは元気です。一時も休むことなく全力で駆け回っています。鬼の赤帽くんがしゃがみこんで十数えています。

僕のあるベンチからは、植え込みに隠れている子、水飲み場のコンクリートに器用に体を添わせている子、木製のベンチの下にもぐり込んでいる子まで見えました。みんな、目をキラキラさせながら鬼の隙をうかがっています。

「ケンタみつけた！」

赤帽くんが急に大声を上げました。見ると、ベンチの下にもぐり込んでいた例のくりくり頭のケンタが、外に出ようともがいています。もぐり込んでみたはいいものの、いざ外に出ようとしたら服がひっかかってしまったうまく出られなかったようです。

赤帽くんはゆうゆうと缶のところに戻り、「ケンタみつけ。」と言ってポコンと缶を踏みました。ケンタは悲しそうに肩を丸めて、すぐそこ鬼の陣地にやってきます。最初に捕まってしまったことが悔しいらしく、早くも半べそになっていました。

20

15

10

5



最初に捕まってしまったケンタは、缶の近くのクスノキの下で悔しそうに唇をどがらせたまま足をブラブラさせていました。やはり、年の少ない幼い子から見つかっていきます。次に見つかったのは、ケンタと同じ年くらいの女の子でした。

「ゆみ、みっけ。」

赤帽くんは俊敏で、次々に子どもたちを見つけていきます。最後に残った潤一も、缶を蹴ろうと飛び出したものの、あと一歩で競り負けてしまいました。鬼が勝って、ゲームが最初に戻ります。

「じゃあ、今度はケンタが鬼だ。」

潤一たちのルールでは、最初に捕まった子が次の鬼になるようでした。ここからがずいぶん長く感じました。小学二年生だというケンタは体が小さく、どんなに頑張って走っても、どんなに目を凝らしてみんなを探してみても、五年生や六年生の子もたちに、あっという間に缶を蹴られてしまいます。缶を蹴られてしまえば、次の鬼も当然ケンタです。何度もケンタの鬼が続きます。泥だらけのケンタは今にも泣き出さんばかりでした。

——この年頃の子どもは、ひとつふたつ年が違っただけで体格も動きも違ってくるんだなあ。しかない。缶ケリはやめて、別の遊びをした方がいいよとアドバイスするか。

二十歳を過ぎた僕が出て行って口出しするのは大人げないと思いましたが、いつまでも幼いケンタ一人に鬼をやらせておくのはあまりにもかわいそうでした。僕が立ち上がり、潤一を呼ぼうとしたときでした。

「ちょっとみんな集合ー！ 緊急会議を開くで。」

潤一の声でした。潤一が手を挙げてみんなを缶のところ呼び寄せます。何をするつもりか興味があって、僕は上げかけた腰を再びベンチに下ろしました。潤一が、泣きべそをかいているケンタの頭をぐしゃぐしゃと乱暴になでています。

5  
俊敏  
行動などがすばらしいこと。

「これはあかん。ゲームにならへん。どうしたらええと思う？」

一人の女の子が手を挙げて言いました。

「小さい子はあかんし、鬼の役は大きい子だけがやったらええんちゃう？」

「それはあかんやろ。不公平や。」

潤一の一言で女の子は考え込んでしまいました。潤一が他の子にも同じように聞いています。赤帽くんに尋ねました。

「タア坊はどう思う？」

赤帽くんが答えます。

「小さい子は、二人で一緒に鬼やってもええことにしたらどうやろ。」

潤一が大きくなずいています。

「みんな、それでどうや？」

子どもたちの顔がパツと明るくなりました。

「したら、隠れてる子を探す鬼と、缶をふむ鬼に分けたらどうやろ。」

「そうや！ 探す方の鬼はゴムボールを持って、隠れてる子を見つけたら、その子の名前を言って、缶の所におる鬼にそのボールを投げるのはどうやろ。で、ボールを捕ったら缶が踏める。捕りそこねたら、鬼はそのボールを拾いに行かんとならん。そうすれば、うまく行くのと違うかな。」

頭の後ろに髪を結った女の子がそう提案しました。みんなから「おおー！」と歓声が上がります。

「きまりや。」

潤一がケンタとゆみを呼び寄せました。

「あんな、ケンタとゆみは二人で協力して鬼をせえ。ケンタがみんなを探して、見つけたら大声で名前を言って、このボールをゆみのところに投げるんや。ほんで、ゆみはボールを捕ったら缶を踏む。」

これでどうや。」

「ええよ。」

「うん。それでええ。」

それは……と、僕は口を出そうとしてやめました。

子どもたちは瞳をキラキラさせながら、ケンタとゆみの二人を残して再び公園内に散っていきま  
す。ケンタももう泣いていませんでした。

——きっと、うまくはいかないだろうけど……。

ボールを投げて捕るというのは、そう簡単なことではありません。しかし、彼らなりに考えてル  
ールを決め、みんなが納得しているのです。

ベンチに座っている僕のところ、きゃあきゃあ笑いながら缶ケリを楽しんでいる子どもたちの  
声が届きます。

公園を吹き抜ける初夏の風は、とてもさわやかに感じられたのでした。



かん  
缶ケリ

ルールやマナーを守る

●「缶ケリ」を読んで考えたこと



著作権の関係から WEB 上には掲載していません。  
ご了承ください。

著作権の関係から WEB 上には掲載していません。  
ご了承ください。

著作権の関係から WEB 上には掲載していません。  
ご了承ください。

# まいど！

●「まいど！」を読んで考えたこと



生命を大切に

生命のある限り、  
希望はあるものだ。

ミゲル・デ・セルバンテス

(スペインの作家)

思いやる

思いやりのある言葉は  
短く簡単なものであっても、  
その反響は実に無限である。

マザー・テレサ

(ノーベル平和賞受賞者・修道女)

感謝する

感謝は支払われるべき  
義務であるが、  
何人もそれを  
期待する権利はない。

ジャン＝ジャック・ルソー

(フランスの思想家、哲学者)

努力する

一日一生。

一日は貴い一生である。

これを空費してはならない。

内村鑑三（思想家）

ルールやマナーを守る

自らを制し得ない者は

自由たり得ず。

ピタゴラス

（古代ギリシャの数学者、哲学者）

あいさつをする

人に好感をもたれたければ、

誰に対しても

あいさつをすることだ。

デーブル・カーネギー

（アメリカの著述家）



# 「こころの再生」府民運動

中学校

## 「大切なこころ」を見つめ直して

指導助言者 横山 利弘 元関西学院大学教授  
元文部省教科調査官

「こころの再生」府民運動の趣旨を盛り込んだ道徳教育資料作成  
ワーキング会議（略称：資料作成ワーキング会議）メンバー

山野 佳世子 大阪府教育委員会首席指導主事  
向井 正明 大阪府教育委員会指導主事  
田中 真樹 大阪府教育委員会指導主事  
藤田 卓也 大阪府教育センター指導主事

---

発行：大阪府教育委員会

〒540-8570 大阪市中央区大手前2丁目

平成26年3月

イラスト ●アフロ／イメージナビ／イラストAC／小田啓介／  
日下部謙太／堀じゅん子

写 真 ●アフロ／イメージナビ／熊博毅／坂本照／  
フォトライブラリー／読売新聞社

---